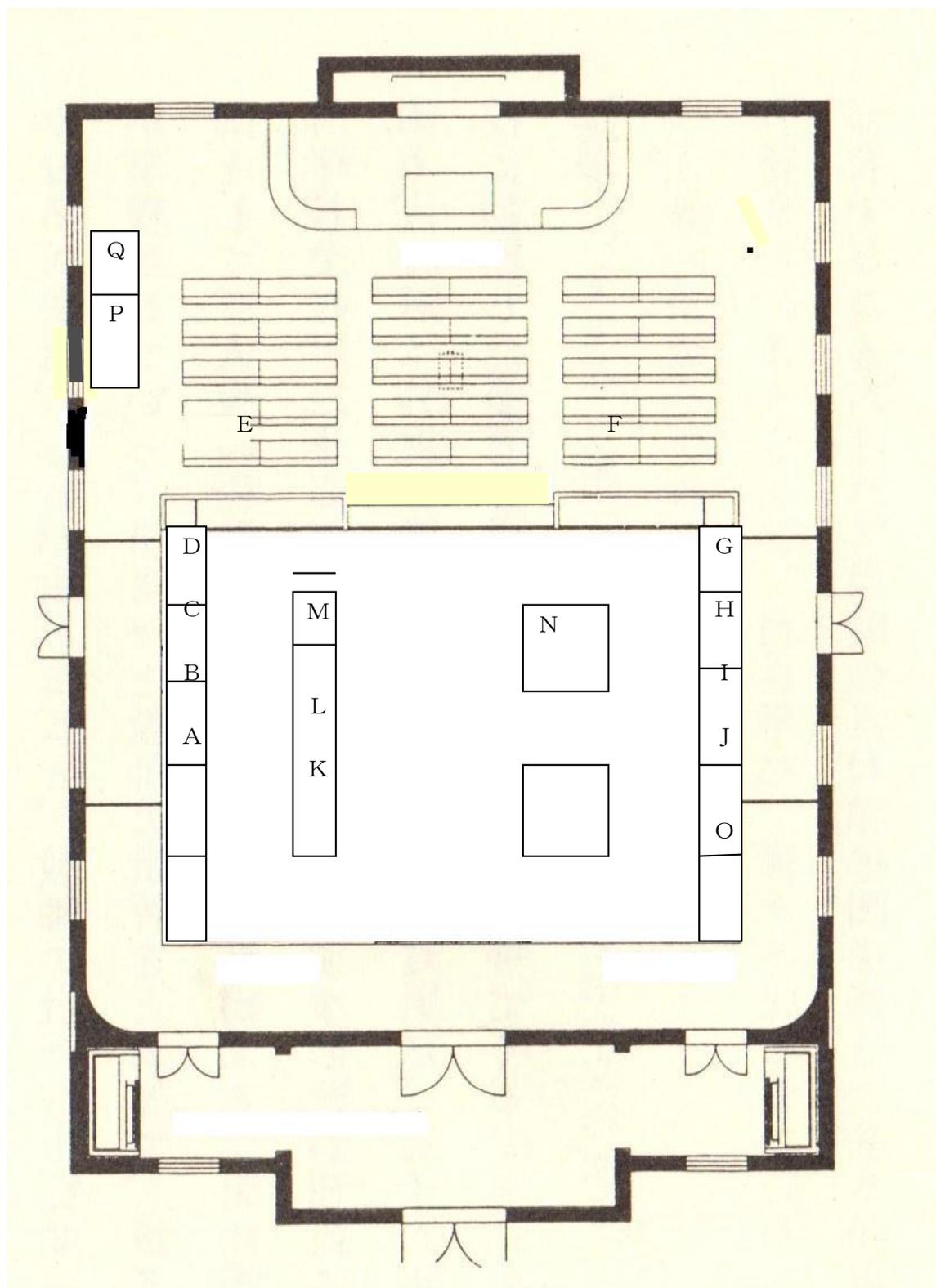


資料館平面図



資料館展示構成について

本校資料館は、明治37(1904)年に建てられた旧茨城県立太田中学校講堂であり、昭和51(1976)年に国の重要文化財に指定された。これを機に、本校の歴史を伝える資料を展示できる場にするため検討が重ねられ、平成2(1990)年に創立90周年事業で資料館として整備された。館内の展示は同窓生から寄せられた品々で構成され、太田中学・太田一高の歴史を伝えていた。

しかし、平成23(2011)年の東日本大震災により被災し、耐震復旧工事等のため平成26年9月まで閉館していた。この工事で展示ケースが更新されたことに伴い、今回展示内容の再構成を行った。今回の展示では、「資料館が見守った青春一太中・太田一高の110年―」というテーマで資料を年代順にまとめ、写真や解説を追加して、学校の歴史とそれぞれの時代の学生生活が理解できるようにした。

以下、ケースごとのパネル原稿と展示品解説である。

1 展示内容

資料館内のケースは17基、それをA～Qとし(本稿末館内図参照)、A～Jで明治から平成に至る110年の本校の歴史をたどる展示とし、K～Mは企画展示、N～Qはこれらに含まれないものをまとめた。ここではそれぞれのケースごとに作成したパネルの原稿と展示品解説を掲載する。

A 開学の頃

本校は明治33年(1900)年4月1日茨城県立水戸中学校太田分校として開設された。日清戦争後、国家的要請に応える人材が求められ、全国的に公立中学校増設の機運が高まっていた頃である。県北に中学校をという地元の熱い要望を受けて開設された当時、まだ学校の敷地も定まらず、太田町塙町の浄光寺を仮校舎として4月21日入学式を行った。6月には太田町立太田高等小学校の増設新築校舎を仮校舎として、そこで現在地に移るまでの3年近くを過ごした。

その間に明治35(1902)年茨城県立太田中学校として独立し、明治36(1903)年3月、現在地に木造瓦葺二階建本校舎・木造瓦葺平屋建第一校舎・木造切妻瓦葺平屋建生徒控室の新校舎が完成し移転した。明治37(1904)年1月には第一校舎増築・第二校舎・第三校舎(理化教室)、11月には講堂(現在の資料館 国指定重要文化財)・渡り廊下・銃器室が完成し学校としての施設も整い、12月4日日本講堂で開学式典が行われた。(本校の創立記念日はこの日を以て制定された。)そして、翌明治38(1905)年3月第1回卒業式がこの講堂で挙行された。本校は今年創立114年を迎える。時代の変遷の中で施設も様変わりしてゆく中、創建以来の建物で現存するのはこの講堂のみである。

本校は常に多大の好感と後援とにつつまれて歴史を重ねている。現在の学校敷地も、開学当時太田町の予算2000円と久慈郡内町村の方々からの寄付1000円で地主から買い上げたのち寄付されたものである。



A 展示(部分)

〔地図〕 太田一高周辺

〔写真〕 太田小学校校舎 1900(明治33)年6月から1903(明治36)年3月までの仮校舎として使用

契約書綴 1900(明治33)年～1974(昭和49)年

開校当初からの契約書の綴りである。仮校舎であった浄光寺や太田小との契約書、寄宿舎の契約書なども含まれており、貴重な資料である。

契約書 1900(明治33)年4月2日付の浄光寺庫裏等を借りる契約書。

〔写真〕 浄光寺庫裏

茨城県指令 1901(明治34)年1月26日

本校の用地は太田町が地権者より買入後本校に寄付するという形をとった。6000坪の敷地購入費用3000円の内1000円は久慈郡内町村からの寄付金を募った。その折の寄付の証書である。

〔写真〕 第一回卒業生記念写真 1905(明治38)年3月29日

太田中学校第一回卒業生54名の講堂前での記念写真である。

歳入歳出精算書 1900(明治33)年～1979(昭和54)年

本校の歴史を物語る資料であるとともに、各時代の本校の姿とその時代背景を伝える資料として興味深い。毎年の歳出決算書は、予算がどのように使われたか決算額とともに説明書も添えられ、学校の教育環境が整えられていく様子を伝えている。

B 創立十周年の頃

20世紀初頭は、日本が日露戦争(1904～1905年)によって列強と並ぶ帝国主義の世界体制を維持する軍事的色彩の濃い社会へと変貌していった時代である。そうした時代の中で明治43(1910)年本校は創立十周年を迎える。11月18日には創立十周年の記念式が行われ、益習会『會報』も創刊された。この『會報』は、明治41(1908)年の雨天体操場の完成により施設も整い、同窓会、益習会など校内外の組織も充実し、「久慈・多賀郡の俊才を集めた」「珂北唯一の学舎」と称される太田中学校のこの時期の発展隆盛の様子をよく伝えている。

『會報』の「本校記事」には開校から10年間の「累年入學率」「累年退學率」「入學數ニ對スル卒業退轉學數ノ百分率」などの貴重なデータが載っている。

明治39(1906)年10月16日、益習会は日露戦争の大勝を永遠に記念しようと、文芸部の図書閲覧室を基礎として戦勝記念の文庫を設立することを決議し、趣意書に賛同した有志の寄付によって「記念文庫」が生まれた。『會報』には、明治39年12月22日に発表された記念文庫設立趣意書、総額約2400円に達した寄付の芳名録、明治43(1910)年当時の蔵書2478冊の目録など、貴重な資料が伝えられている。この文庫は太田中学校校図書館の基礎となり、現在もその蔵書が残っている。

B 展示(部分)



〔写真〕 校舎全景・校舎前景 1910(明治43)年

『會報』創刊号口絵

〔写真〕 校舎前景 1910(明治43)年

『會報』創刊号 1910(明治43)年11月18日発行

「累年入學率」

尋常小学校6年修了から受験資格があったが、入学者の約四割が高等2年修了者で、入学者の平均年齢は毎年14歳を超えている。また、10年間の入学試験の平均倍率は1.7倍であった。

「累年退學率」

退学の事由は、家事都合が多い。大工の賃金が4日で1円であった時代、開学当初の月謝1円(太田中学として独立してからは1円20銭)が農村出身の生徒たちにとっては大きな負担であったことが窺える。

「入學數數對する卒業退轉學數ノ百分率」

入学者のうち卒業に至るのはその三分の一である。

記念文庫優待券

寄付者に発行されたもの。記念文庫は校内のみだけではなく寄付者・卒業生も利用できた。

記念文庫蔵書

『會報』創刊号(1910) 蔵書目録に記載されている書である。

〔写真〕 記念文庫 『會報』創刊号(1910) 口絵

〔写真〕 閲覧室 『會報』創刊号(1910) 口絵

〔写真〕 太中生 敝衣破帽で放歌高吟・1910(明治43)年

〔写真〕 友人とともに 1910(明治43)年

C 太中生の生活 ―益習会・保会・寄宿舎―

「益習会」は長い歴史を持つ組織である。明治33(1900)年6月1日体育奨励のため職員生徒を持って組織された体育会が、明治35年11月3日益習会と改称し、「体育を奨励し學術を研究し専ら校風を振興し会員の交誼を親密にすること」を目的に、職員・生徒で組織された。明治33年6月1日には野球部、明治34年9月庭球部、11月撃剣部(明治37年に剣道部と改称)、明治36年演説部(談話部、明治38年文芸部と改称、大正13年弁論部独立)、明治41年文芸部より記念文庫分離(益習会直属)、明治42年柔道部、明治43年遊技部(大正13年に競技部・写真部に分離)が設けられた。益習会は、運動会をはじめとする様々な行事を行う一方で、本校の教育活動をさまざまな面で支え続けていた。

「保会」は生徒の校外活動を指導する組織として分校創設と同時に成立した。生徒の居住地をもとに、その通学路、方向により保区を設定し、各保区では監督として教員が指導を担当し、毎学期1回以上保会を開いた。上級生と下級生の融和を図り、生徒同士の親睦会も兼ね、楽しい行事の中で胸襟を開き語りあう機会となり、保会は太中生にとって校外の生活では最も印象に残るものであったという。

通学できない遠隔地からの入学者の増加への対応として、明治36年3月から寄宿舎を設けた。入舎できるのは日立より北、及び大子方面の生徒に限られ、舎監の教師家族との家族的な共同生活であった。寄宿舎は昭和4年7月の久慈浜常北太田間の電車の開通により12月を以て廃止された。



C 展示

(部分)

〔写真〕 野球部 1900(明治33)年・1911(明治44)年

〔写真〕 庭球部 1911(明治44)年

〔写真〕 柔道部 1910(明治43)年

保会記録 1940(昭和15)年

町外九保区の五年生送別会次第・余興プログラム。記録感想によれば、卒業生は最後の保会ということで独唱をしたり、感想を述べたりしてなごやかに過ごした様子が見える。

〔写真〕 保会遠足 大洗方面・日立方面・西山荘(大正2年1月21日) 町外七保

〔写真〕 和服姿の寄宿生

〔写真〕 寄宿舎(西1町)

寄宿舎は舎監の教師家族との家族的な共同生活であり、上級生と下級生の間は真の兄弟のようにこまやかな情愛によって結ばれ、郷里を遠く離れた多感な少年がお互いに慰め励ましあって勉学にいそしみ郷愁を覚えることもなかったという。

〔写真〕 寄宿生記念写真

D 二十五周年まで―大正期の太田中学―

明治末から大正にかけての時期は、第一次世界大戦(1914～1918)への参戦を契機とする経済成長により日本社会が変化していった時である。同時に、植民地支配が本格化し「帝国日本」として

のかたちが整っていった時期でもある。そうした中、卒業生が社会の各方面で活躍する姿が『會報』の「特別会員（卒業生）通信」に綴られている。

創立以来正式の校旗をもたなかった本校に、大正3（1914）年第1回卒業生（明治38年3月卒）から卒業十周年を記念して、校旗が寄贈された。翌大正4（1915）年には校歌が制定された。作詞武島羽衣・作曲小松耕輔である。この校歌は太田の歴史と伝統を織り込んで太田中学生の意気軒昂をあらわすにふさわしいもので、今日も歌い継がれている。

益習会は、大正12（1923）年、御真影奉安所を前庭に建設し、翌大正13（1924）年6月簡易水道を設け、また、大正12年9月の関東大震災に際しては、同窓生の罹災者を救済するため義捐金を募集した。

大正13（1924）年、本校は創立二十五周年を迎える。益習会は同窓会と協力して創立二十五周年を祝して記念館を寄付した。設計は卒業生の古茂田甲午郎（中8回）、請負人は創立時の校舎・講堂の建築を請け負った山口子之松であり、7月14日に落成した。赤い瓦屋根にモルタルの外壁、屋根に天窗を付けたモダンな造り。一階は図書館、二階は集会室。図書館は書庫と閲覧室とからなり、閲覧室は十二脚の大机を備え70～80名が利用でき、蔵書数は約3,300冊であった。この記念館は昭和46（1971）年新校舎建築に伴って取り壊されるまでの50年近く学校図書館としての役割を果たした。



D 展示(部分)

記念館棟札 1924(大正13)年5月14日

創立二十五周年記念誌(『會報』第3号) 1924(大正13)年

四色版の記念館をはじめとして多くの口絵を収めている。当時の校舎の様子、益習会各部の活動の様子などを伝える貴重な資料である。また、発刊の辞で、当時の伊藤正弘校長が益習会会員相互の情報交換や母校の現状を紹介するため、『會報』を今後毎年一回発行することを呼びかけ、4号以下19号(昭和16年2月)まで『益習會報』として発刊されることになる。

〔写真〕 記念館

記念館外観 1924(大正13)年『創立二十五周年記念誌』口絵

閲覧室 1938(昭和13)年卒業アルバム

二階集会室 1924(大正13)年

二階の壁間には横山大観をはじめ茨城県下の当時の現代美術大家の絵画及び幕末勤皇の志士の遺墨を飾った。

25周年記念祝賀会メダル 1924(大正13)年11月

寄付受付簿 1922(大正11)年5月 起

記念館完成についての生徒作文 1924(大正13)年10月28日

E 太中生の生活 一入学から卒業まで一

昭和になると、厳しい入学試験に合格し希望に胸ふくらませて太田中学の門をくぐった新入生の写真が残っている。

毎日の授業は体育館兼生徒控所の集合から始まる。伝達事項はすべてここに掲示された。体育館の両側に棚と腰掛けが取り付けられてあり全校生徒五百名が毎時間ここに整列し、級長が引率して教科の先生と教室に入った。授業が終わると自由に体育館の自席に戻り、次の準備をした。授業時間は午前4時間、午後3時間、土曜は半日であった。3学期制の学年末試験で平均60点未満或は1科目50点未満(大正8年50点を40点に緩和)があれば落第として発表された。学年試験成績表は全校

生徒分を1冊にまとめ銘々に配布された。

創立当初の修学旅行は食料持参で筑波・日光・箱根等を行き先とした2～5泊の徒歩旅行が専らだった。しばらくは各学年で行われていたが、のちには5年生のみが実施するようになった。大正12(1923)年の関東大震災後、それまでの関東近県を止めて、関西方面への旅となった。一週間から9日間かけて東京・伊勢・奈良・大阪・京都をまわり、帰途は神戸から横浜まで汽船に乗るという旅行は生徒が大変楽しみにしていた行事であったが、昭和12(1937)年を最後にこの旅行が中止されることになり、生徒たちは大変残念があったことが『益習』第17号に見える。

最初の卒業記念アルバムが作られるのは昭和2(1927)年である。戦前の卒業記念アルバムは昭和16(1941)年まで作られた。日々の授業の様子など当時の様子を伝える貴重な写真が収録されている。



E 展示(部分)

〔写真〕入学式記念 1935(昭和10)年 講堂玄関前

〔写真〕校舎前景 1928(昭和3)年3月卒業アルバム

志願票 1929(昭和4)年3月

帽章 1917(大正6)年頃・1920(大正9)年頃

名札 1936(昭和11)年卒(中32回)

授業料納入袋 1941(昭和16)年～1946(昭和21)年

成績表

1909(明治42)年～1913(大正2)年 (中10回)

1936(昭和11)・1937(昭和12)年 (中37回)

学年試験成績表 1914(大正3)年3月

〔写真〕長距離競走 1940(昭和15)年3月卒業アルバム

第1回全校長距離競走は昭和11(1936)年11月21日に行われ、その後毎年行われた。太田駅前スタート、1・2年6キロ、3・4・5年8キロ、ゴールは成田山であった。

長距離競走賞状 1936(昭和11)11月21日

〔写真〕修学旅行

1906(明治39)年 水戸旅行

1911(明治44)年 箱根旅行

1923(大正12)年 最後の東京周辺への旅行(皇居前)

1932(昭和7)年 伊勢神宮

1935(昭和10)年 関西旅行の帰りは神戸から横浜まで船旅

1940(昭和15)年 紀元2600年に聖地参拝として行われた修学旅行(興福寺)

〔写真〕授業風景 1932(昭和7)3月卒業アルバム 実験室・教室

卒業記念アルバム 1927(昭和2)年3月

卒業證書 1938(昭和13)年3月8日

賞状及び賞品 1939(昭和14)年3月8日

(硯箱) 成績漸進賞 5カ年間成績漸進の者に与えられた

賞状及び賞品 1937(昭和12)年3月9日

(常陸社寄贈置時計) 平均点90点以上の者に送られた特別賞

F 戦時体制の中の太中

昭和12年7月の盧溝橋事件に端を発した日中戦争から、昭和16年12月の日米開戦を経て昭和20年8月の終戦に至るまでの戦時体制下、本校教育も戦時色が顕著になった。

日露戦争が社会を軍事的色彩の濃いものへと変貌させていった時代に開学した本校は、当初から銃器室があり、行軍（付近往復五、六里まで三年生以上は銃を運び、全校生徒での徒歩旅行）や、発火演習（一泊二日で、校外に露営する模擬の戦闘演習）なども行われていた。大正14（1925）年4月陸軍現役将校が学校に配属され、「教練（軍事上の教育と訓練）」が正式科目となり、県下中学校射撃大会、兵営宿泊、戦争を想定した野外演習が熱を帯びる。

昭和13（1938）年には夏季休暇中の3～5日程度の集団勤労作業を、翌14（1939）年には休業時だけではなく随時行い正課に準じて取り扱うようになり、昭和16（1941）年には1年を通じ30日以内で授業を廃して実施できるようになる。昭和17（1942）年の学校動員令により本校生徒も、農繁期の労力奉仕は恒常的になり、他にも飛行場建設、道路工事、校庭を耕し食糧増産にも励んだ。昭和19（1944）年2月戦時非常措置要綱により学徒を1年間常時動員できる体制になり、7月18日から高学年は日製多賀工場に旋盤工として動員され、昭和20（1945）年2月からは校舎の一部が日製多賀工場の兵器工場となり、戦時色一色になっていく。

教員も召集され出征し、生徒の中からも予科練として3年修了で志願入隊するもの、陸士、海兵、海軍経理、海軍兵器学校等の軍関係の学校へ進学するものが増えた。

〔写真〕 狭窄射撃場土木作業

大正14（1925）年9月14日起工式、その後10月28日完成した。

そのための設備もないので、生徒たちが毎日放課後1組ずつ土木作業をして、横10m、深さ1.5m、幅1mほどのコンクリート作りの狭窄射撃場が作られた。

学校教練必携 1933（昭和8）年

学校教練教科書 1940（昭和15）年

教練検定合格証明書 1928（昭和3）年3月12日

賞状 茨城県中学校射撃大会 1935（昭和10）年10月6日

〔写真〕

1 突撃 1935（昭和10）年アルバム

2 若宮八幡宮祈願 1941（昭和16）年アルバム

3・4 全県下中学連合演習

1940（昭和15）年11月8・9日県北・県南を舞台に中学生3500名を動員して実施。

5 教練同様盛んに行われた体育 1931（昭和6）年

6 運動会 1941（昭和16）年アルバム

7 神宮大会出場選手 右端 自転車競争優勝 和田熊三氏 1942（昭和17）年

8 入隊した久保木君を送る 1940（昭和15）年3月

9 ゲートルを巻いた太中生

10 紅顔の青年将校 後藤少尉（中37回） 1941（昭和16）年3月

11 出征する先生を送る 1943（昭和18）年先生にも召集令が下り、出征の度に太田駅まで生徒たちが見送った。

〔写真〕 柏村成太郎氏

柏村成太郎氏遺書

昭和18（1943）年太田中学4年を終え、4月1日予科練入隊（二期生3215名入隊うち861人戦死）。昭和20（1945）年4月6日神風特別攻撃隊第一草薙隊九九艦爆20機40名とともに九州国分基地より沖縄に向い敵艦船群に突入戦死。「19歳で生涯を終えた彼の心境を思い、私は言葉が出ません。」という級友（中41回）によって寄せられた資料である。

疎開転学綴

昭和19年3月から昭和20年1月までの転学者の転学願や成績証明書等が綴られている。「都市疎開に伴う地方転出証明

書」など、緊迫した時代の相を伝えている。

G 時代の波 — 新制高校へ —

太平洋戦争の終結とともに、日本の社会は大きな転換を迫られた。学校制度も例外ではなく、本校の前身である「茨城県立太田中学校」は、昭和 23(1948)年 4 月、新制の「茨城県立太田高等学校」として新たなスタートを切った。この「太田高等学校」は昭和 23 年度の一年間のみ存在し、翌 24 年度からは「茨城県立太田第一高等学校」となり現在に至る。

ここに、時代の波に翻弄された一人の太中生の寄贈品がある。彼は五年制の旧制中学の卒業生であると同時に、新制高校最初の卒業生となった。旧制中学は五年制で、学制改革の移行期であったこの時期のみ、いったん卒業した後もう一年在籍することで新制高校の卒業資格を得られたのである。

ノートには、細かい字でびっしりと生物や物理の学習内容が書き込まれている。一方、教科書の余白に描かれた当時の先生の似顔絵など、少年らしい面も垣間見える。戦後の急激な物資窮乏の中、丹念に書写した手製の参考書もある。厳しい状況の中でも、学ぶ姿勢を忘れなかった太中生の一端がうかがえる貴重な品々である。



G 展示

- ガリ版刷りの英語プリント (昭 22 頃)
- ノート類 (昭 22 頃)
- 地理の教科書 (昭 18 頃)
- 手作りの学生鞆 (昭 18 頃)
- 常北電気鉄道 (日立電鉄) の定期券 (昭和 23 頃)

H ①農業科と定時制 — 新たな学びの形 —

新制高校として、地域の実情を考慮した高校の総合化を推進するため、昭和 23 (1948) 年 4 月、本校に全日制と定時制の普通科、昭和 24 (1949) 年 4 月には農業科が設置された。

農業科は現在の硬式テニスコート付近に教室が造られ、各学年 1 クラス (定員 50 名) の生徒が農業の基礎を学んだ。その後学校再編により、農業科は昭和 37 (1962) 年の入学生を最後に募集を停止し、昭和 40 (1965) 年 3 月に廃止された。本校の百十余年の歴史の中でわずか 16 年間しか存在しなかった農業科だが、卒業生の多くが農業に従事し、常陸太田を巨峰ぶどうの産地とする原動力となった。現在、本校前庭の一角には、農業科があったことを記念する石が静かに眠っている。

定時制には、勤労青年の学びの場として、昼間定時と夜間定時の 2 コースが開かれた。戦中戦後の混乱で、勉学の機会を奪われていた青年達が、働きながら学ぶことができると入学者が殺到したという。(昼間定時は昭和 33 (1958) 年に廃止。) 時代の変化に伴い生徒数は減少しているが、本校では多様な学習の場として今日まで定時制の灯をともし続けている。

[写真] 農業科廃止の記念石

[写真] 回転式鶏舎 1955(昭和 30)年頃 現在の定時制給食室の辺りにあったと思われる。

H ②卒業五十周年祝賀会・国際交流

昭和 32 年 (1957) 年 2 月 23 日、同窓会記念事業の一つとして、第 1 回卒業生を招待し、卒業五

十周年祝賀会が開催された。この記念行事は、同窓生同士及び同窓生と在校生の連帯の強さを誇る太中、太田一高同窓会の事業として定着し、昭和48(1973)年4月21日、50年の風雪を越えた先輩にあやかるとともに、社会の中堅として活躍する年代を激励する意味も込めて第1回卒業二十五周年祝賀会が卒業五十周年祝賀会と同時に開催され、その後現在まで続く行事となっている。

本校の国際交流プログラムは、昭和52(1977)年の日米交流に始まる。姉妹校に生徒を派遣しホームステイをしながら姉妹校の授業に出席し、「生きた英語」を学ぶだけではない、貴重な経験を積む機会となっている。一方、姉妹校からの生徒も受け入れ、ホストになる本校生徒は勿論のこと、学校全体で歓迎会や普通の授業などで交流を深めている。相手校は湾岸戦争による中断をはさみ、最初の米国から現在ではオーストラリアのリリーデイル・ハイツ高校となって交流を続けている。

卒業五十周年記念文集 1993(平成5)年・1994(平成6)年・1995(平成7)年

1993(平成5)年に卒業五十周年祝賀会を行った中39回卒業生から記念文集を出している。

〔写真〕第2・3回卒業五十周年記念祝賀会記念 1957(昭和32)年11月7日

第2・3回卒業生15名が出席した。

『かけはし』 1997(平成9)年3月31日

1977(昭和52)年から1996(平成8)年までの太田一高国際交流20の歩みの記録

アルバム 1983(昭和58)年3月 Dos Pueblos H.S. より贈られた日米友好の記念アルバム

〔写真〕ハインブル先生、キング先生歓迎会(1994年7月16日)

〔写真〕常陸大宮ライオンズクラブ歓迎交流パーティー(1995年7月11日)

I 施設の更新

新制高校になり、生徒定員も増加し、戦前からの施設では手狭となった。その上、創立以来の施設は老朽化が進み、昭和30年代以降施設の更新・新設が続いた。在校生にとって教育環境の充実は喜ばしいことであったが、一方で、太田中学時代の面影は消えていった。

主な施設設備の更新・新設

昭和32(1957)年	運動場拡張	
昭和36(1961)年	体育館兼講堂竣工	(創立六十周年記念事業)
昭和42(1967)年	プール完成	
昭和45(1970)年	新校舎完成	(創立七十周年記念事業)
	11月19日新校舎移転	旧本館取り壊し(12月15日まで)
昭和46(1971)年	旧校舎・記念館取り壊し	
昭和49(1974)年	前庭整備・校門完成	
昭和54(1979)年	特別教室棟竣工	
昭和55(1980)年	益習会館竣工・中庭整備	(創立八十周年記念事業)
昭和63(1988)年	体育館竣工	(創立九十周年記念事業①)
平成元(1989)年	弓道場落成	(創立九十周年記念事業②)
平成2(1990)年	資料館整備完了	(創立九十周年記念事業③)
平成9(1997)年	第二グラウンド完成	(創立百周年記念事業)

運動場拡張記念手拭 1957(昭和32)年

従来の運動場の北側の畑地を、新旧運動場の接合部分は農道として使用可能という条件付きで買収し運動場を拡張した。

〔写真〕旧本館 1966(昭和41)年3月卒業記念アルバム

学校敷地平面図 『学校要覧』より 1956(昭和31)年・2014(平成26)年 学校要覧

〔写真〕

- 1 体育館兼講堂 1961(昭和36)年 県地元折半で建てられ、当時としては県内屈指の規模を誇った。
- 2 プール 1967(昭和42)年
- 3 新校舎建設のために取り壊される旧校舎 1969(昭和44)年10月
- 4 新校舎への引っ越し 1970(昭和45)年11月19日
- 5・6 旧本館解体 1970(昭和45)年
- 7 資料館周囲 (旧校舎土台御影石使用) を使った
- 8 中庭水道 (旧校舎土台御影石使用)
旧校舎の土台はすべて御影石であった。旧校舎解体時に「我々を育ててくれた土台だ」と思った卒業生の機転によって残された。
- 9 旧校門 1966(昭和41)年 創立60周年
- 10 校門 1974(昭和49)年
石を寄付した中野慶吉氏(中16回卒)は「石の面を磨くにはいろいろの方法がある、割りっぱなし、小たたき、磨きかけるなどです。生徒に校門の石をとおして、石も磨ければ輝き、磨かざれば輝きなし、ということを知らせたい。」と条件を出した。
- 11 旧門柱のプレートは現在中庭の植え込みの中に保存されている。
- 12 益習会館 1980(昭和55)年
- 13 体育館 1988(昭和63)年

J 資料館整備

昭和36(1961)年講堂兼体育館が竣工した。旧制中学時代の生徒数(昭和17年まで入学者数は約150名)に比べて、新制高校になり定員が急増(昭和36年当時の入学者数は350名)し、講堂の収容人数が限界であり、また旧体育館が老朽化し危険であることから建設が急がれた。

講堂は、卓球場や部室として使われていた。その後も校内の施設が次々と更新され、それに伴い古い施設が次々と姿を消してゆき、講堂も移転の検討がなされていた。こうした中、昭和51(1976)年2月3日国指定の重要文化財となった。

講堂の保存のための修理工事は昭和59(1984)年3月に終了した。一方旧講堂整備委員会を設置し、昭和63(1988)年3月太田一高の資料館として整備することを決定し、平成元(1989)年11月設計、平成2(1990)年8月31日に工事が完了した。事業は卒業生を中心とした募金とPTAからの資金援助によってすすめられ、展示は卒業生等から寄せられた太田中・太田一高在学中の品々で構成されている。

平成23(2011)年3月11日の東日本大震災で、本資料館も被害を受けた。壁漆喰の亀裂、天井漆喰の剥落、土台木部のズレ等様々な被害があったが、特に屋根瓦がズレ、度重なる余震で脱落し、雨漏りが続いた。

資料館復旧に向けて関係各位の努力は勿論のこと、生徒たちも「資料館を救おう」と生徒会・JR C・図書委員会合同で募金活動を行った。

平成25(2013)年12月資料館の震災復興工事が終了し、明治37(1904)年の講堂竣工から110年目の平成26(2014)年10月資料館は再開することができた。

〔写真〕文化財指定前の講堂内部

- 1 創立五十周年記念音楽会 1949(昭和24)年10月2日 希望音楽会員の客演
- 2 音楽会 1956(昭和31)年度 卒業アルバム
- 3 音楽クラブ 1961(昭和36)年度 卒業アルバム
- 4 卓球部 1966(昭和41)年度 卒業アルバム
- 5 西山杯弁論大会

6 クラスマッチ (卓球) 1969(昭和44)年度 卒業アルバム

〔写真〕 講堂保存修理工事

- 7 保存修理前屋根
- 8 保存修理前鬼瓦
- 9 屋根
- 10 鬼瓦修理
- 11 鬼瓦修理
- 12 鬼瓦修理
- 13 保存修理工事完了 1984(昭和59)年3月
- 14 国指定重要文化財指定書

〔写真〕 東日本大震災被災

- 15 瓦がずれた屋根
- 16 雨漏りによる被害
- 17 「資料館を助けよう」募金 チラン
- 18 内部壁の亀裂
- 19 ずれた土台
- 20 「資料館を助けよう」募金

〔写真〕 耐震復旧工事

- 21 足場が組まれた外観
- 22 屋根
- 23 内部 床
- 24 内部 壁
- 25 内部 前室天井
- 26 内部 壁

K 記念帖

題箋は後藤新平の手によるこの記念帖には、大正2(1913)年から昭和17(1942)年にかけて本校を訪れた人々の揮毫がある。以下詳述する後藤新平・大町桂月以外にも、井上円了(哲学者、「哲学館」現在の東洋大学の創立者)、風見章(内閣書記官長)らの揮毫もある。

後藤新平

政治家。台湾総督府民政局長・満鉄総裁・逋相・内相・外相・東京市長などを歴任。(1857～1929)

大正2(1913)年5月21日太田町実業倶楽部及び睦会が主催し太田中学校講堂を会場として講演会が行われた様子を、「いはらき新聞」(大正2年5月22日)が伝えている。それによると、江木翼(内閣書記官長、司法大臣)、濱口雄幸(内閣総理大臣 1929—1931)とともに、後藤新平が「古今労働の変遷」と題する講演を行った。本校図書館に掛けられている額もその折に揮毫されたものと思われる。

大町桂月

詩人・評論家。(1869～1925)

『創立二十五周年記念号』(1924年11月)に、大正9(1920)年4月12日文藝部が大町桂月を招聘し、談話会を開いた記録がある。当時教員と学生で結成した文藝回覧誌「蛍雪」の題字も揮毫している。桂月は第4代伊藤正弘校長と同郷、一高も同窓という間柄であり、本校には他に桂月の書

も所蔵されている。



K 展示

記念帖 1913(大正2)年3月～1942(昭和17)年3月

記念帖より 一後藤新平— 1913(大正2)年3月

「来々去々蝶身 軽偏向荘周 夢裏行 霞宿雲遊 真自在不須毎 日間前程 大正癸丑春日 新平」

記念帖より 一大町桂月—

「半寿提封 正史成神州 大義始介明 老来道得 知高志一臥 西山夢亦清 詠義公 桂月」

『螢雪』1919(大正8)年発行

〔写真〕『螢雪』1周年記念 1920(大正9)年5月

L 写真に見る講堂

明治37(1904)年以来太田中学の歴史とともにあった本講堂は、さまざまな写真にその姿を残している。入学式・卒業式の記念撮影はもとより、たくさんの記念写真はこの講堂を背景にして撮られている。また、卒業式・予餞会・弁論大会などの学校行事の記録写真にもその姿をとどめている。

山形清氏(明治44年・中7回卒)は創立六十周年記念誌に「母校の思い出」として、講堂について次のように述べている。



「…母校の思い出は沢山あります。然し今でも眼前に浮かんで来るのは、立派な講堂とテニスコートです。ロンドンのセントジェームス宮殿には会議の為縷々出入し、バッキンガム宮殿にも両三回入りました。イランの宮殿にもインドやトルコやオーストリアやエジプトの古い宮殿も見ました。皆とりどりに壮麗であり、又豪華でもあります。それなのに私の眼に残るのは、あの母校の講堂です。何故であるか私には説明出来ません。恐らく目に焼き付いているのでしょう。…」

L 展示

〔写真〕明治43年 『會報』創刊号 口絵

〔写真〕卒業式 1936(昭和11)年 卒業アルバム

- 〔写真〕 予餞会 1935(昭和10)年 卒業アルバム
- 〔写真〕 剣道部 1938(昭和13)年 卒業アルバム
- 〔写真〕 紀元2600年式典 1941(昭和16)年 卒業アルバム
- 〔写真〕 卒業記念 講堂内部 入口側 大正6(1917)年3月 中13回卒
- 〔写真〕 卒業記念 講堂内部 正面 大正12(1923)年3月 中19回卒
- 〔写真〕 卒業記念 講堂外観 西側 設計図どおりの車寄せ屋根 大正10(1921)年3月 中17回卒
- 〔写真〕 寄宿生記念 講堂外観 東側 明治40(1907)年3月
- 講堂正面車寄せ詳細図 設計者駒杵勤治の設計図
- 〔写真〕 入学式 講堂正面玄関 1936(昭和11)年4月
- 〔写真〕 校庭の桜とともに 講堂外観 1928(昭和3)年4月
- 校庭の桜は1905(明治38)年の記念植樹である。
- 〔写真〕 陸上部記念 講堂外観 西側 現在の車寄せ屋根 昭和16(1941)年
- 〔写真〕 卒業記念 講堂外観 北側 大正13(1924)年3月 中20回卒業生

M 昭和10年代前半の太中生

佐々木健氏(昭和15年・中36回卒)から寄せられた太田中学在学中の写真をもとに、当時の卒業アルバムの写真とともに、昭和10年代前半の太田中学校生徒の学校生活をたどる。

- 昭和10(1935)年4月入学(149名)
- 昭和11(1936)年2月二・二六事件
11月第1回全校マラソン大会
- 昭和12(1937)年7月盧溝橋事件
9月本校初の防衛演習・防空演習実施
12月南京陥落を祝い、太田駅まで旗行列
- 昭和13(1938)年5月徐州陥落につき太田若宮八幡宮に参拝
11月県北中学校青年学校連合演習(太中5年生)
水戸堀原練兵場周辺 参加生徒7247名
- 昭和14(1939)年5月陸軍現役将校学校配属令施行十五周年 皇居前天皇親閲式
6月聖地参拝の関西方面修学旅行
10月太田町近郊の農家へ勤労奉仕
明治神宮国民体育大会 自転車競争競技県代表太中生優勝
- 昭和15(1940)年3月卒業(112名)



M 展示

〔写真〕

- 1 *入学記念写真(1年甲組) 1935(昭和10)年4月
- 2 *水戸二聯隊兵営宿泊(4年2組) 1938(昭和13)年11月

- 3 長距離競走 1938(昭和13)年卒業アルバム
 - 4 中隊教練 1936(昭和11)年卒業アルバム
 - 5 *現役将校学校配属令公布十五周年記念 御親閲式場(皇居前広場)
昭和14(1939)年5月22日、全国1800校から教職員3000名・生徒代表32500名が執銃、帯剣で集まり、天皇親閲式を行った。
 - 6 弁論大会 1938(昭和13)年卒業アルバム
 - 7 南京陥落祝賀 1938(昭和13)年卒業アルバム
 - 8 *現役将校学校配属令公布十五周年記念 御親閲式
太田中から参加した代表10名、引率3名 朝日新聞社前にて
 - 9 予餞会 1939(昭和14)年卒業アルバム
 - 10 聯合演習(堀原練兵場) 1939(昭和14)年卒業アルバム
 - 11 *聖地参拝としておこなわれた関西方面修学旅行1939(昭和14)年6月
往復とも夜行列車泊の五泊六日。最寄り駅から目的地まではすべて歩行行軍。服装は制服、制帽で巻脚絆をつけて軍事教練で使用する雑嚢を肩にかけ、総指揮官は陸軍歩兵少尉であった。(朝日新聞社屋上)
 - 12 西山荘碑前にて 1939(昭和14)年卒業アルバム
 - 13 聯合演習(堀原練兵場) 1939(昭和14)年卒業アルバム
 - 14 *聖地参拝としておこなわれた関西方面修学旅行1939(昭和14)年6月(蔵王堂)
 - 15 喜びの日 1939(昭和14)年卒業アルバム
 - 16 教練査閲 1940(昭和15)年卒業アルバム
 - 17 *野外演習 5年丙組 1940(昭和15)年1月
 - 18 5年丙組 実験 1940(昭和15)年卒業アルバム
 - 19 運動会 1940(昭和15)年卒業アルバム
すべてのスポーツは国防運動となり、競技も皆武装して行われた。
 - 20・21 卒業写真 1940(昭和15)年卒業アルバム
- * 佐々木氏寄贈

N 史学会の活動

一高史学会は、昭和24(1949)年の創立以来、その研究は郷土の考古学、民俗学等多方面にわたり、県北史学研究の中心的存在であった。

昭和27(1952)年には東大人類学教室の酒詰教授から直接指導を受けて、久慈郡坂本村南高野貝塚の発掘を行い、その成果を『史考』第10号(1953年発行)に報告している。この調査は久慈川以北の貝塚の最初の確認として高く評価された。

常陸太田市内東部に位置する幡古墳群発掘は長い伝統の中でも卓抜な業績である。発掘調査は昭和28～29年の第一期、40～41年の第二期、50年頃の第三期に分かれる。第二期は一高OBを含めた史学会、二高史学部、市文化財調査員、茨城県考古学理事を交えての調査であった。

調査報告によると、幡古墳群は古墳時代後期に造営されたと思われ、1基の前方後円墳を含め30余りの古墳で、出土品は、盗掘された古墳もあり全容は不明確であるが、勾玉類、鉄鏃、刀子類、環頭、金環、土師器、須恵器の土器片が多数出土している。古墳群の北東部には須恵器窯址群があり、古墳群との直接的関係は確認できないが、幡台地南部には50基余りの横穴があり、何らかの関係もあろうと報告されている。こうした調査研究は部誌『史考』にまとめられている。

また、この『史考』には、茨城民俗学会を設立した、藤田稔教諭の指導による地域の民俗についての聞き取り調査もよくまとめられている。

砥石 瑪瑙原石 1965(昭和40)年 金砂郷村玉造遺跡 出土遺物

砥石は鉄製工具を磨くために使用。

瑪瑙原石は地名が示すとおり当地方で勾玉が作成されていたことを示す。

勾玉 丸玉・小玉 1957(昭和32)年 常陸太田市山吹山古墳 出土遺物

埋葬用須恵器 1962(昭和37)年 常陸太田市西山遺跡 出土遺物

土器(縄文中期) 1952(昭和27)年 日立市南高野貝塚 出土遺物

土師器(高坏・甗) 常陸太田市瑞龍町小野遺跡 出土遺物

『史考』 第10号 1953(昭和28)年・第14号 1958(昭和33)年・第17号 1963(昭和38)年
第19号 1967(昭和42)年

○ 大礼服

明治44(1911)年太田中学を卒業した山形清氏(中7回)が特命全権大使赴任の際の大礼服である。氏は太田中学卒業後、旧制一高・東京帝大法科を卒業、大蔵省を経て外務省に入った。英国大使館勤務後、昭和2(1927)年ジュネーブ軍縮会議随員、本省欧米局第二課長外務書記官、そして、昭和5(1930)年ロンドン軍縮会議では、若槻全権の通訳として活躍した。昭和13(1938)年以降、コロンビア、ベネズエラ、チリ各国公使を勤め、戦後はマッカーサー司令部との連絡事務局(終戦連絡中央事務局)次長であった。その後昭和27(1952)年から昭和31(1956)年まではパキスタン大使として活躍した。

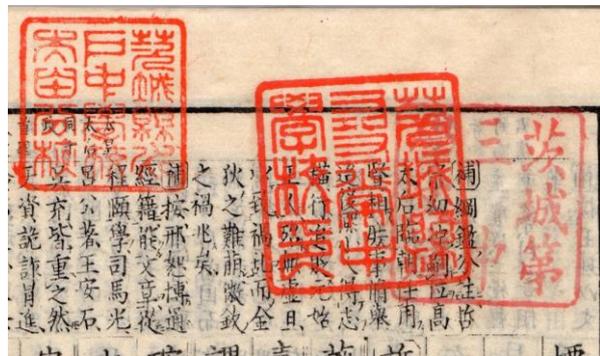
氏は『會報』や『記念誌』に折々の文章を寄せている。太田中学の後輩にとっても、「劍橋(ケンブリッジ)大學雑感」(1924年『創立二十五周年記念号』各学校通信)などは、大いに刺激的な文章であったと思われる。

P 教科書・教材

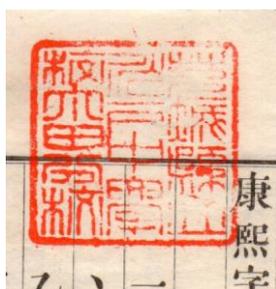
蔵書印に見る太田中学の歴史



江戸時代末期に水戸藩久慈郡
大田村に設置された郷校
益習館



茨城県第三中学校
茨城県尋常中学校
茨城県水戸中学校太田分校



茨城県立水戸中学校太田分校



茨城県立太田中学校

明治期の教科書

昭和期の教科書

英語教科書 1871年発行・1927(昭和4)年 2年生が使用・1938(昭和13)年発行

英語辞書

1885(明治18)年出版 日本語訳が縦書きである。

1944(昭和19)年4月に太田の書店で購入し、物資のない時代なのでカバーを掛けて大切に大学まで使った辞書。戦時中も英語学習に取り組んだ太中生のエピソードは『益習の百年』等にも見える。

雲形定規 1948(昭和23)年

顕微鏡 1928年製・制作年不詳

Q 出版物

『會報』

1910(明治43)年創刊号、1916(大正5)年第2号、1924(大正13)年創立25周年記念号、その後1926(昭和元)年より『益習會報』として毎年1回発行。1941(昭和16)年第19号まで発行。

『益習』

1949(昭和24)年文芸部が発行した学校新聞『はばたき』は、翌1950(昭和25)年文芸部から独立した新聞部が『益習タイムズ』として発行し、1951(昭和26)年生徒会の出版委員会がその発行を引き継ぎ、1956(昭和31)年『益習』の名に改め今日に至っている。

『青龍』

卒業記念誌『青龍』は、1953(昭和28)年創刊された。この『青龍』は旧制中学時代の『益習會報』の継承発展を目指したものであることが、編集後記からもうかがえる。

『あけぼの』

1950(昭和25)年7月創刊の定時制生徒会誌

「定時制が日の出の如くに発展することへの願い」をこめて『あけぼの』と命名された。全日制の『青龍』に先立って発行され、定時制の歴史を映す鏡の役割を担う雑誌である。

『同窓会会員名簿』 1920(大正9)年に第1回の太田中学校同窓会名簿が発行された。

『同窓会報』 1911(明治43)年9月30日第1号が創刊された。

『記念誌』

『創立五十周年記念号』 1949(昭和24)年10月発行

『創立六十周年記念誌』 1961(昭和36)年10月発行

『創立70周年記念誌 益習』 1970(昭和45)年12月発行

『太田一高80年の歩み 益習』 1980(昭和55)年11月発行

『太中・太田一高創立90周年記念誌写真でつづる90年 益習』 1990(平成2)年9月発行

『益習の百年』 2000(平成12)年10月発行

『鯨岡』 1948(昭和23)年創刊 文芸部雑誌

初期の『鯨岡』の特徴は当時の本校教員が部員と一緒に作品を発表していることである。1952(昭和27)年には本校職員による文芸同人誌「牙」も発行されている。

『今を生きる』 1961(昭和36)年3月6日発行 太田一・二高弁論部機関誌 後に『西山』と改称

西山杯争奪全国高等学校弁論大会は全国各地からの出場者を招き、この講堂で行われた。

『郷土地誌』 1953(昭和28)年3月3日発行 地理研究部誌